

ラテンアメリカ地域研究から国際開発の現場へ —世界銀行エコノミストとしての経験から—

From Latin American Studies to International Development: My Experiences as World Bank Economist

箕輪 真理
MINOWA Mari

1. ラテンアメリカとの出会い

今回の『地域研究』42号は、特別号として「海外フィールドにおける現地調査」をテーマとしている。ここに原稿を寄せておられる研究者は、それぞれ独自のフィールドをもって現地調査を長年続けてこられた専門家である。一方、私は、一応「ラテンアメリカ地域研究者」ということになっているが、本稿で紹介するのは、おそらく他とは少し趣向の異なる、途上国開発プロジェクトの現場としてのフィールドである。

私は日本で生まれ、日本で育ち、22歳の夏に1年間のカナダ留学に出かけるまで、一度も海外に出たことのなかった純粹の日本人である。そんな私が、その後、カナダでの1年間を加えると合計18年の年月を海外で生活することとなった。日本に帰国してからすでに19年ほどたつので、成人として過ごした人生のおよそ半分を海外で、半分を日本で過ごしたということになるだろうか。そんな私が海外で過ごした地域をあえてフィールドと呼ぶならば、3つの地域が挙げられる。一つは、留学のために1985年に渡米し、その後2000年までの15年を過ごすことになったアメリカ。二つ目は、日本国際開発センターでの仕事から始まり、その後ワシントンでの世界銀行勤務でたくさんの時間を過ごすことになったラテンアメリカの国々。最後は、国連アジア太平洋経済社会委員会（UN-ESCAP）の仕事で2年間を過ごしたバンコクである。しかしアメリカは私にとって調査対象のフィールドではなく、生活のベースであった。そこで本稿では、世界銀行エコノミストとして7年余りを過ごしたラテンアメリカにフォーカスして私の経験をお話ししようと思う。

私は、1984年3月に筑波大学大学院修士課程地域研究研究科を修了した。子供のころから未開の地域にあこがれていた私は、大学の理系学部時代には、今西錦司の著作などを読み、アフリカでの霊長類研究などに興味を持っていた。しかしその興味は移ろい、自分が研究者になるなどというはっきりとした計画も持たず、大学での講義でたまたま興味を持ったラテンアメリカ経済を教えてくださいました細野昭雄先生とのご縁で筑波大学大学院に進学したのだった。アフリカではなく、ラテンアメリカをしばらくの研究対象として選んだのだが、その社会の形を大きく規定す

る特徴のひとつである中南米諸国の経済社会格差について、その背景をよく理解したいと考えた。同時に、それまでに出会っていたラテンアメリカの音楽やダンス、文学に惹かれ、ラテンの文化に親しみを感じたことも、私をラテンアメリカ研究への道に導いた要因だったかもしれない。

その後、修士課程で勉強するうちに、途上国開発の現場、そして国際機関で仕事をするのが次の目標となった。国連職員の試験なども受けて合格していたが、もう少し勉強して博士号を取り、何かの分野の専門家になることが、将来を通して世界銀行のような国際機関でプロフェッショナルとして仕事をするためには必要であると考え、アメリカの大学の博士課程で、分析のツールとしての経済学を学ぶことを目指した。留学準備のため東京で1年余り、財団法人日本国際開発センターで、コロンビアへの円借款のための事前調査などに関わらせてもらい、その後休職して、アメリカ留学へと向かったのが1985年の夏であった。

II. 世界銀行エコノミストとしての7年間

1. 初めての大事な仕事

コーネル大学経済学研究科に入学して8年、その間の紆余曲折は省くが、長いこと苦勞してようやく博士論文を書き上げ、1993年の夏、私はようやく経済学の博士号を取得した。博士論文は、ブラジルの労働者個票データと勤務先産業データを組み合わせて、ブラジル労働市場における賃金格差を効率賃金仮説 (efficiency wage hypothesis) のフレームワークで分析した実証研究である (Minowa 1993)。開発経済学分野でも、近年は、フィールドで研究者自身がデータを集めるランダム化比較実験を用いた実証研究などが主流となってきているが、私が大学院生だった時代は、まだ、経済学者は基本的にフィールドでの現地調査などは行わず、実証といっても大規模データをコンピューターで分析するところまでだった。私の博士論文も、ブラジルのデータは使っていても、論文を書くためにブラジルに行ったわけではないし、データを所有する研究者からそのデータを使うことを許されて、当時のメインフレームコンピューターで自分でコードを書いて、モデルの検証をただけである。そうはいても、データ分析の作業はとてもの時間のかかる仕事だった。メインフレームコンピューターでひとつの回帰分析を走らせるのに一晩かかるような時代だった。

博士号取得が現実となりつつあるころ、私は研究者として大学に職を得ることを考えてはいなかった。長い大学院博士課程在学中に、フィールドであるラテンアメリカから遠ざかってしまっていたが、私の興味はやはり開発の現場であり、開発プロジェクトの仕事にかかわることだった。幸いなことに1993年夏、私はワシントンにある世界銀行 (正式には、国際復興開発銀行) にエコノミストとして採用され、中南米第二局の社会開発部に配属された。世界銀行で正規職員として採用されるのはとても難しいとされているが、たまたま私のボスとなる韓国人の部長に拾われた。1993年冬から春にかけて、博士論文が最終段階に差し掛かったころ、世界銀行の名簿を入手して、ラテンアメリカ関係の部署に履歴書とレターをいくつも送っていたのだが、いくつ

かの面接を経て仮採用された。その後、能力試験として、エルサルバドルで世銀が実施した教育プロジェクトのインパクトエヴァリュエーションについてコンサルタントが提出してきたレポートについて、その内容を分析・評価する仕事を課された。どうにかその仕事を認めてもらえたようで、開発金融の経験もほとんどない私を正規職員として雇ってくれた。求めよさらば与えられんの心境である。

私が開発の現場での経験を積むことができたのは、世界銀行のエコノミストとして1993年から2000年までの7年間、ラテンアメリカの国々を回って、開発プロジェクトの立ち上げ準備からフォローアップのモニタリングまで、現場を体験させてもらえたことによる。国際機関がどのような組織なのか、その中でどう仕事をしたらよいのか、初めは全くわからない私だったが、採用してくれた部長は、新米のエコノミストに、メキシコ政府が融資を要請してきた大規模プロジェクトのタスクマネージャー（プロジェクトマネージャー）をやれと命じた。実はこの時、やりたいかどうかをまず部長に打診された。まだ就職して間もなかった私は周りの先輩に相談し、やはり自分にはまだ荷が重いと判断して、その仕事をいったん辞退したのだったが、部長は私のその回答に「がっかりした、残念だ。やると言ってくれると思ったのに」と言って、結局私にその仕事を命じたのである。

世銀での私の初めての大きな仕事となった「メキシコ職業教育・訓練近代化プロジェクト」(Mexico Technical Education and Training Modernization Project) は、メキシコの労働者が、それぞれの職務における技能の到達度について雇用者側である企業や企業連合によって適正に評価される仕組みを作り出すこと、そして学校教育においても、そうした労働者の技能評価につながる職業教育がデザインされることを目指していた。労働者教育、職業訓練を供給側の学校の論理ではなく、需要側の雇用主の論理に基づいて効果的なものにしてゆくことを求めていた。そのために、通常のプロジェクトではありえない、政府内の二つの省、教育省と社会保険労働省が協力して実施する複雑なプロジェクトとして設定されていた。メキシコ政府がこのプロジェクトに対して世界銀行から資金融資を受けたいと言ってきたことを受け、その趣旨をより詳しく確認するため、部長以下、数名のスタッフがメキシコシティに向かった。そのミッションに私も加えられ、メキシコ政府代表との初めてのミーティングで、部長は私をこのプロジェクトのマネージャーだと紹介したように記憶している。そのころはまだ、仕事を始めて1～2か月ほどしかたっておらず、メキシコについてもあまり知らない私は、10人以上会議室に並ぶメキシコ政府を代表するお役人たちの前で、スペイン語で自己紹介することになったが、緊張で声は震えていたと思う。

そのような若い、経験もないアジア女性がプロジェクトマネージャーだと言われて、メキシコ政府側がどう思ったか直接確認はしていないが、当然不安に思ったかもしれないし、もっと経験のある信頼できる人物を窓口を選んでこなかった私のボスに対して、不信任感を覚えても不思議ではなかった。それでも私はタスクマネージャーとして、開発プロジェクトサイクルのスタートから、最終的には翌年1994年秋に、このプロジェクトを世界銀行理事会の審議にあげ、4億ドルほどだったと記憶する融資の承認を得るまで、たくさんの勉強をさせてもらった。また開発プロジェクトは、貸し付けが決まって終わりではなく、その後、プロジェクトが実施される何年間

かにわたって定期的なフォローアップミッションが続き、プロジェクトの実施状況、問題点などを政府の関係者とともに点検する作業がある。それらも含めて、世界銀行で担当した様々なプロジェクトを通して、ラテンアメリカを知り、国際機関の現実を（ある程度まで）理解し、そのプロセスのなかで自分への自信も高めることができたのは幸せなことだったと思う。その後2000年に世銀を退職するまで、メキシコのほか、アルゼンチンやウルグアイの中等教育プロジェクト、エクアドルの社会支出調査、ジャマイカの若年層暴力問題の調査など、様々な経験をすることができた。

2. クライアントとの信頼関係

国際開発の現場で、お金を貸し付ける銀行である世界銀行の開発プロジェクトを担当する人間にとって、フィールドとして訪問する相手国政府は、調査対象ではなくクライアント、お客様である。世界銀行にも研究を中心に行う部局があり、そこで働くエコノミストにとっては、対象地域は研究対象としてのフィールドなのであろうが、オペレーション部局にいる我々プロジェクトスタッフにとって、クライアントとしての相手国政府との関係は、通常の地域研究の現地調査対象との関係とは異なるものだろう。そこでの7年間の経験からは、たくさんの学びや気づきがあった。その一部を、いくつか記憶に残るエピソードも交えて紹介しよう。

まず、頼りない新米タスクマネージャーがどのように成長していったのか。中南米第二局での仕事は、ほとんどスペイン語が中心となる。現地へのミッションでは当然、スペイン語を使って政府関係者とも協議し、書類作成もスペイン語、世銀の同僚やコンサルタントもほとんどスペイン語ネイティブであった。ワシントンで仕事をするときには当然英語で事足りるのだが、ミッションに出かけると、仕事が終わって同僚たちと夕食を食べる時なども、すべてスペイン語での会話になる。こうしたミッションに参加し始めたころ、仕事のスペイン語はまあどうにかわかるし自分の言いたいこともある程度言えたが、リラックスすべき夕食などの席で、同僚が皆スペイン語で盛り上がりジョークで笑っているのに私ひとり何が起きているのかわからない状態が続き、そればかりは苦痛だった。その後、一年のうち三分の一はラテンアメリカへのミッション(出張)で過ごす生活が続くようになり、スペイン語での高等日常会話(?)もこなせるようになったが、それでもワシントンに戻り、英語で話せる生活に戻るとほっとしたものである。フィールドで仕事をやる人間にとって、それが研究者であれそうでない立場であれ、現地の言葉で生活できること、仕事ができることは、やはり欠かすことのできない条件である。もちろん、国際語である英語で通用する部分もあるが、相手のことを本当に理解したいと思うなら、その地域の言葉ができることは必要不可欠である。言葉は人のありようを映すものだとつくづく感じる。複数の言葉を話す人達からもよく聞かし、自分でも感じるのは、その時話している言葉によって自分が変わる感覚である。日本語を話している私と、英語を話している私、スペイン語を話している私は違う人間という感覚である。フィールドを研究の対象としている研究者にとっては、対象と自分が同化しすぎるのは望ましくないのかもしれないが、やはり「言語」が話し手に与える影響には否定しがたいものがあると思う。だからこそ、地域研究者は、研究対象地域の言語をしっかりとマス

ターしたい。

メキシコプロジェクトを担当し始めて数か月がたったころだったと思う。世界銀行はもちろんそれまでも長年にわたって、たくさんのプロジェクトをメキシコで実施してきており、そうした仕事を担当してきた外部のコンサルタントたちがいた。そのうちの一人を同僚に紹介され、私のプロジェクトの準備スタッフとして雇用した。彼はラテンアメリカ出身のエコノミストだったが、1～2回メキシコへのプロジェクト準備ミッションに同行してもらった。すると、ある時、メキシコ側の政府関係者がたくさんいる会議の席で、そして私の前で、「このタスクマネージャーは経験もないし、メキシコのこともよくわかっていないので、あまり頼りにならないだろうと思うから、私のことを頼りにしてもらいたい」というような発言をした。さすがに私も頭にきた。世銀内部でのコメントで発言するならまだしも、こともあろうにクライアントに対してプロジェクトの責任者の信用を損ねるような発言をするなど、到底容認できる行為ではなかった。それまでも、彼は、私のボスである部長に対して、タスクマネージャーは代えたほうが良いというような発言をしていたらしいが、部長は私をかばって、自分はマりに任せたのだから、彼女のやりたいようにやらせる、と答えていたようだった。確かに自分の実力がそれほど素晴らしいものではないことを自覚してはいたが、それでも全力で仕事をしていて、クライアントとの信頼関係も築いていかなければならない。そのクライアントに対して、プロジェクトの責任者の信用を損ねるような発言をしたことが許せず、その直後に、宿泊していたホテルに戻ってはっきりと抗議した。ワシントンに戻ったあと、このコンサルタントとは信頼関係に基づく仕事はできないと判断し、自分の判断で契約を解除した。彼のほうが経験者であったし、それまで世銀の中で築いてきた評判もあったのだろうが、だれも私の決断に抗議することはなかった。研究者がフィールド調査をする際にもおそらく同様のことが言えるのだろうが、どんな仕事でも、同僚を信頼できること、そして同僚や仲間から信頼してもらえることは、何よりも大切である。そして、それを勝ち取るためには、時には勇気を持った決断も必要だ。

一口に開発金融といっても、それを受ける側の政府の力にも、国によってかなりの違いがある。メキシコは、世銀からの融資を受けているとはいえ、世銀のクライアントの中では所得レベルも高く、優秀な人材もたくさんいる、洗練された、発展レベルの高い中所得国である。そうした国の政府で働く人々は、誇りも高く、よそ者をうまく手中に収めて動かせるほどの組織力もある。そのようなメキシコで、私がその後何年間かにわたって、クライアントとの良い関係を保ちながら仕事を続けられたことは、自分への自信にもつながったが、一方で、もしかして私は、彼らの思惑の中で動かされただけだったのかもしれない、との思いは少し残る。

新米タスクマネージャーは、そのあとも、たくさんの同僚や上司に助けられながら、メキシコのプロジェクトパートナーたちとも次第に信頼関係を築き、1年ほどの準備期間を経て、無事に融資承認に至った。ところが、ちょうどプロジェクトが理事会承認された直後の1994年のテキーラショックで政府の財政事情は激変し、プロジェクトへの融資金額を大きく修正する必要に迫られた。それでも、教育省と社会保険労働省とが共同で、そして民間企業組合も関わった形で、こ

のプロジェクトは実現した¹。書類の完成のために毎日夜中までオフィスに一人残り、数時間の睡眠のために自宅に戻る生活を繰り返したり、その後のメキシコへの出張では、複数のプロジェクトモニタリングを梯子して、徹夜で報告書作成に追われて朝を迎えたりなど、体力があつてこそできた仕事だったとも思う。体のタフさと、ストレスに耐えるメンタルの強さと、両方求められるのは、開発の仕事でも、現地調査が関係するどのような仕事でも同じかもしれない。それでも、フィールドを愛する私たちは、そうした困難を乗り越えても余りある喜びを、フィールドにかかわる時間から得ているのだと思う。

世銀での仕事を通じて学んだことの一つは、初めはたとえ馬鹿にされたとしても、誠意をもって仕事をし、クライアントであるパートナーのことを理解しようと努力を続け、そして責任をもって自分の仕事を全うすることで、次第に信頼を勝ち取ることができるということだった。そして世銀での7年間には、楽しいこともたくさんあった。



写真：メキシコ政府のプロジェクト担当者
と地方視察の夜（1993年ころ、バラク
ルスにて）

3. 海外のフィールドで自分の身を守る

毎回のミッションは、短くて1週間、長くて3週間くらいの期間で、主に首都の中央省庁の政府関係者が仕事相手である。財務省、中央銀行、教育省、社会保険労働省などの担当者とミーティングをし、一緒に地方への視察にも出かけ、中にはとても気のあう仲間のようになった人たちもいる。世銀のミッションが来れば、政府関係者はそれなりの準備をし、おいしい食事などに招待してくれたりもする。地方への視察では、カウンターパートのプロジェクト担当者たちと山奥の村の小学校を訪ねたこともあるし、地方都市の組合や政治家を訪ねたこともある。そうした場で、世界銀行の代表者として自信ありげにふるまうことにもいくらかは慣れた。メキシコ、アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、ジャマイカと、同じラテンアメリカでもそれぞれ違った空気を持つ。仕事を通して、たくさんの場所に行き、自分の肌感覚として、たくさんの文化に触

1 「メキシコ職業教育・訓練近代化プロジェクト」は、2003年に実施期間終了後、世銀の内部レビューを受けている。それによると、プロジェクトの成果、世銀自身のパフォーマンス、メキシコ側実施機関のパフォーマンスの全てで「不十分 (unsatisfactory)」という評価となった。政府内の複数機関がかかわるプロジェクトのデザインが複雑すぎたことが、このような低い評価となる原因の一つだったと考えられる。

れ、人々に会えたことは、一言にまとめるなら、「とても楽しかった」。ただその中で、やはり実感したのは、ラテンアメリカ社会を特徴づける大きな所得格差、経済格差である。ラテンアメリカで見られる格差の現実とは、とても日本の感覚からは想像もできないレベルのものだが、その中に身を置き、快適に仕事はかどりと、クライアントの中に友人などもできてゆく中でも、頭の片隅に、あまり快適になりすぎてはいけないはずだという違和感も持ち続けた。それは、世界銀行エコノミストとしての仕事に対するいくらかの居心地の悪さとして、私の中にあり続けた。

世界銀行のミッションは、各地でそれなりの安全なホテルに宿泊する。そのような高級ホテルで行き届いたサービスを受け、そうしたホテルがある比較的安全で富裕層の住む地域で買い物をし、レストランで食事をする。そのような快適な生活に人間はすぐ慣れてしまうものである。しかし、そのような生活は、「開発」「貧困削減」に携わっているはずの自分の中に、少なからず疑問を生じさせるものでもあった。世界銀行のエコノミストとして自分の仕事に誇りは持ちながら、それでも、よそ者としての自分が快適な環境の中で「開発」の仕事をし、相手国の人々を「助けている」と考えることには戸惑いもあった。

ラテンアメリカに対して多くの人が持つイメージは、危険な場所ということではないだろうか。確かに、貧富の格差がとても大きいラテンアメリカ諸国では、社会的な底辺に追いやられた人々が暴力に走ることもあり、危険で足を踏み入れてはいけない場所は明らかにある。そうでない、中間層が暮らす街や、高級住宅地でも、常に、自分の身の安全には注意を払い、ボーっとしてはいられない。自分の身を守るための勘のようなものも、海外のフィールドで仕事をする人たちには必要なスキルである。幸い、私は長年ラテンアメリカで仕事をした間、ほとんど危ない経験をせずに済んだ。ただ一度だけ、こわい思いをしたことがあった。ウルグアイの首都モンテビデオで、一週間の仕事を終え、週末に同僚のフランス人男性とメキシコ人女性と町の真ん中を散歩していた。昼日中であったが、週末のビジネス街だったため、人通りは少なく、突然数人の若者に囲まれ、布にカバーされた拳銃のようなものを突き付けられて、金を出せと迫られた。このような場合の常識として、絶対に抵抗してはいけないということがある。持っている貴金属、お金をすべて取られても、命には代えられないから。ところが、その時、何が起きているのかわからないと思った瞬間に、同僚のフランス人がそれらの若者に向かっていった。幸いこの時は、大事にならず、若者たちは散って行って、私たち3人は、そのあと、起きたことの恐ろしさを自覚して震えだした（強盗に襲われたら、絶対に抵抗しないこと！）。世界のほとんどの国は、日本よりも危険である。身を守る感覚を鍛えることは経験から身につくものであるから、日本から外に出て、実際に外の世界を自分で経験しないことには、そうした感覚はなかなか身につかないだろう。道を歩く時も、なるべく現地の人のようにふるまう。今では日本人の多くが海外旅行に出かけるし、留学経験者数も拡大している。海外で自分を守る能力は以前よりもっと高まっているかもしれない。それでも、日本に暮らしていると、自己防衛本能が衰えることは常々感じるところである。

地域研究に携わる研究者は、おそらく皆、フィールドにいるときのほうが生き生きするのだと思う。私にとっても、地域研究の現地調査ではなかったものの、やはりラテンアメリカのどこか

にミッションに出かけて2～3週間を過ごせるときのほうが、ワシントンでの業務より楽しかった。それぞれの場所には、それぞれの空気があり、空の色があり、町の音があって、においがあり、音楽があって、踊りがあり、そして街角のキオスクや道行く人々の装いがあり、田園地帯の風景、そこに生活してそれぞれの文化を生きる人々がいる。そうしたものに直接触れることのできる経験は、それ自体、私にとってはかけがえのないものであり、私の人生をととても豊かにしてくれたものである。これから海外調査をやってみようと考えている若い学生さんたちに、「とにかく海外に出なさい、そうすれば何とかなる。」と激励するのがこの特集全体の大切なメッセージなのだと思うが、私のように、もともと、ともかく外の世界を見てみたいと考えているような人には、わざわざ外に出ることをプッシュする必要はないのかもしれない。私にとっては、「外の世界」を体験できること自体がとても楽しく、あまり心配しないで出かけてしまうほうが、楽観的であることも、海外調査のためには案外必要な素養なのかもしれない。

III. 国際開発の現場から学んだこと

世界銀行とその後のESCAPでの2年も含めて、10年間に及ぶ国際開発の現場での経験を通じて、私はたくさんのことを学んだ。その中で一つだけ挙げるとすれば、自分の考えを持ち、それを表明することの大切さ、そして自分に自信を持つことの大切さである。はじめに述べたように、22歳になるまで日本で日本人女性として育った私は、国際的な場で仕事をするには大きなハンデを負っているとよく思ったものだ。一般に日本人は、大勢の中で自分の意見を堂々と表明するのは苦手である。アメリカの大学院留学中から、自分に自信をもって発言することにどれほど苦労したことだろう。アメリカのような社会で生活していると、いかに彼らが個人として生きているか、それがいかに日本の社会のありようの対極にあるか、実感する。ましてや、女性である私たちは、自分の意見に価値があり、それは自由に自信をもって表明されるべきものであるなどと教わってこない。日本社会の価値観が身につけてしまっていた私は、「自己主張する」ために、たくさん努力をしなければならなかった。私が観察したところ、アメリカの子供たちは、「おまえは最高だ、唯一無二の存在、おまえにはたくさんの才能があってすごい！」と言われて育ち、その結果、それが事実であろうとなかろうと、「自分は最高の存在である」と信じられる大人になる。一方私たちは、謙虚であること、自己主張をせずに出る釘にならないことを良しとして育てられる。違いはととても大きいとつくづく感じた。

確かに自分の頭で考え、堂々と自信をもって自分の考えを主張できることは大切である。しかし、世界銀行で仕事をしてゆく中で、自分の正しさを主張するそうした態度が、次第に行き過ぎに感じられた。世界銀行はワシントンにあって、組織としても欧米的な価値観が主流となっている。そこで仕事をするエリートたちの間にあるのは、「自分たちは正しい答えを知っている、だから開発を実現するために私たちのアドバイスを聞きなさい」というスタンスである。こうした「自信」は、それを受ける側の開発途上国にとって、プラスにもなりうるし、マイナスになることもあるだろう。「White man's burden」(白人の責務)は、19世紀のイギリスの詩人

キプリングによる言葉だが、白人による有色人種の文明化を白人の重荷としてうたった人種差別的植民地主義が、現在の国際開発援助にも連綿と受け継がれていると論じたのが、アメリカの経済学者ウィリアム・イースタリーである (Easterly 2006)。私が世界銀行のエコノミストとして仕事をする中で出会った同僚の多くは、真摯に開発の仕事に向き合い、「貧困のない世界の実現」を夢見て日夜努力を続ける優秀なプロフェッショナルたちだった。それでも、「私たちは答えを知っています」という組織としてのスタンスに対して、次第に違和感が強くなっていったのも事実である。上司から聞こえてくる私の仕事に対する批判の一つとして、「いつもクライアントの意見を聞きすぎる。彼らの要望を受け入れすぎる」というのがあった。結局、私自身、自分が本当に答えを知っているのかどうか自信が持てなくなった、というのが本当のところなのかもしれない。

結局、自分の慣れ親しんだ環境を離れ、新しい環境に身を置くことの価値は、無限に大きいと感じる。多くの学びがあるのはもちろんのことだが、なによりもシンプルに、自分の世界がずっと広がって大きくなる感覚がある。全く日本の外に出ないで人生を終えても、素晴らしい充実した人生を送ることはいくらでもできるだろう。それでも、海外に飛び出して得られる経験は、それを経験した人にしかわからない豊かさを与えてくれる。経験知が何倍にも高まり、それだけ自分への自信も高まる。ともかく、苦勞も含めて、最終的には「楽しい」ものだ。

研究分野としての「地域研究」が今後どのように進展してゆくのかわからない。1975年に筑波大学に修士課程「地域研究研究科」が設置され、紀要『地域研究』が創刊されて、今号で42号の発行となった。そして『地域研究』はこの42号をもって廃刊となる。この最終号に、若い地域研究研究者の皆さんに「ともかく海外に出なさい、そうすれば何とかなる」と励ましの言葉を贈る特別企画を組んでいただいた紀要編集委員の皆さまには、心からのアプローズを送りたいと思う。そしてその中に、私が国際開発の現場で経験したことを、このように雑多に書き綴ることを許していただいたことに感謝してこのエッセーを閉じることとする。

参考文献

- Easterly, William, 2006, *The White Man's Burden: Why the West's Efforts to Aid the Rest Have Done So Much Ill and So Little Good*, Penguin Group.
- Minowa, Mari, 1993, *Variation of the Returns to Schooling across Industries and Firms: Evidence from Sao Paulo, Brazil Manufacturing Sector*, Cornell University.